

---

# 仮典・妖精大戦争

負け犬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮典・妖精大戦争

### 【Nコード】

N3221Z

### 【作者名】

負け犬

### 【あらすじ】

原作から十数年経った幻想郷でチルノを中心とした妖精たちがいろいろやるお話です。

オリジナルの設定、登場人物がいますので、お気をつけください。

## 01話 新しく生まれた大妖精

「おい。大ちゃん。あたいが来たぞ。開けてくれー」

氷の妖精、チルノは森の中にポツンと立っている周りの木と比べると大きめな木に向かって大声で叫ぶ。

チルノは何度か「大ちゃん」の名前を読んだが、木のくぼみにある小さいドアは開く気配が無い。

肌寒さがまだ少し残る幻想郷。

待ちきれないとばかりにあちらこちらで新しい草木が目を出し始めていた。

大空では待つてましたとばかりに春告精のリリーホワイトが飛び回っている。

チルノは長い冬の間、冬の妖怪、レティ・ホワイトロックと一緒に湖で生活していた。

だが雪が溶けて冬が終わった為、レティは力が無くなり、軽い鬱状態になってどこかへ行ってしまった。

そういうわけでチルノは親友の大妖精の家に戻ってきたのだった。

「大ちゃん。……どこか行ってるのかなあ。まあいいや。開けるぞー？」

チルノはドアを勝手に開けて中へ入ってしまった。

木の中はくりぬかれた様に空洞があり、生活感のある小部屋が存在していた。

とは言っても人間の民家に比べると圧倒的に狭く、直径2、3メートル程しかない。

「すう…すう…」

緑の髪をした妖精がテーブルに突っ伏して穏やかな寝息をたてている。

チルノの親友の大妖精である。

「なあんだ。いるじゃないか」

チルノはため息をつく。

「おい。チルノさんが帰ってきたぞー？」

「…うん…おいしいよね…すう…」

大妖精が起きる気配は無かった。

「やれやれ。だらしないなあ、もう昼過ぎだつてのに。あたいには生活リズムは規則正しくとか言うくせに…」

チルノは諦めた様子で木で作られた階段を上っていく。

この木の家は一階が大妖精の部屋+リビング。二階がチルノの部屋となっているのだった。

チルノは自分の部屋の様子を見てちよつと顔をしかめた。

「すっげえホコリだなあ…大ちゃん掃除してくれなかったのか…」

とにかくホコリまみれだった。

チルノはとりあえず窓を開けてホコリを外へ出すことにした。

とりあえずベッドの毛布をばっさばっさと振ってみると、物凄い量のホコリが宙に舞った。

「うわ…すげえ…」

チルノはホコリが乗っている机や棚を手で軽くはたく。風の量がけっこうあり、大体のホコリはすぐに飛んでいった。

「あとは拭き掃除でもすればきれいになるだろ。今日はこれでいいや」

チルノはまだ少しホコリの残る部屋から外の様子を見る。風があるとはいえ日も出ていて穏やかな天気といえる。

チルノは深呼吸をした。

「たった3ヶ月位ぶりだけどやっぱりこの匂い懐かしいなあ」

チルノは窓辺で頬杖をつきながら外の景色をぼんやりと見ていた。うと…うと…

チルノはガクンと寝入りそうになってしまった。

「あたいも一眠りするか」

と言いつつチルノはまだホコリが少し残るベッドをちょっと嫌な顔で見つめる。

ふと気がついたかのようにチルノは手を風に当ててみた。

「…あれ？ まだちょっと肌寒いんじゃないか？」

春とはいえ、つい最近雪が溶け終わったばかりでまだ肌寒い気温が続いている。

チルノは全く平気（できればもっと寒い方がいい）なのだが、大妖精のことが気にかかった。

チルノはうとうとしながらもベッドから抜け出て一階の方へ歩き出した。

チルノは木の階段を降りて寝ている大妖精をお姫様抱っこすると、ベッドに寝かせて毛布をかける。

「すう…すう…」

「全く。大ちゃんはあたいがいないとだらしがないな」

チルノは腰に手を当てて胸を張り、誰も見ていないのにしばらく誇らしげにしていた。

「…さて、寝るか」

チルノは再び二階へ歩いていき、自室のドアを開ける直前で固まった。

「何…だと？」

階段を上がつて一本道のごく短い廊下の奥。

そこにはチルノの見覚えの無い物があった。

木で作られた木のステップ。あまり出来栄は良くない。

それは天井に開けられた見覚えの無い穴へと繋がっている。

「階段？ そんなバカな。この家は2階建てのはずなのに」

チルノの眠気はすっかり吹き飛び、未知のものへの興味と軽い戦慄によって冒険心を掻き立てる。

チルノは知らない階段を上っていく。  
階段はすぐに終わり、その先にはごく狭い小部屋があった。  
隅のほうにベッドがあり、周りには何も無い。  
小窓から差し込む日差しだけが部屋を照らしている。

「……………すう……………」

微かな寝息が聞こえる。

チルノは恐る恐るそのベッドに近づいた。

「な……に……!?!?」

ベッドに見知らぬ妖精が寝ていた。

髪は黒いショートヘアで、大妖精やチルノよりも幼さの残る顔。

「……はっ!」

チルノは慌てて小部屋から出て階段を降り、家から外へ出てから  
三階のところを見る。

するとチルノの部屋の窓の上に小窓があるのが確認できた。

「この家に住む大ちゃんがこの窓に気づかないはずが無い。という  
ことは大ちゃんがあの妖精を意図的に住まわせている?」

チルノはわなわなと震えながら家の中に入る。

大妖精が寝ているベッドの前まで歩いていく。

そして、一言。

「大ちゃんの……大ちゃんの裏切り者! ロリコン!」

「え!?!? なになにに!?!? 何が起こったの!?!? あれ、チルノちゃ

ん!？」

「うわーん!」

チルノは嫉妬のようなよくわからない感情に襲われながら、全速力で家を飛び出した。

- - - - -

チルノは人間の里の近くまで飛んで来ていた。

「何であんなこと言っちゃったんだろう」

大妖精は妖精の中でも力のある妖精である。

その為、力の弱い妖精から見れば頼れる存在でもある。

だから行き場の無い妖精を泊めてあげていると考えればそれ程おかしいことではない。

7

「どうしようかな。戻ってみようかな」

チルノがそこら辺を行ったり来たりしていると、人間の里の方から女性の姿が見えた。

髪は銀色で長い。服装はワンピースで独特のフリルがついている。そして変な帽子をかぶっていた。

「けーね先生…」

「おお、チルノじゃないか。久しぶりだな。…どうした? いつもの元気が無いじゃないか」

上白沢慧音。

彼女は人間の里で寺子屋を経営していて、チルノはたまに招待)



教材として）される事がある。

子供達には”慧音先生”と呼ばれていて、チルノもその呼び方を真似ている。

.....

「先生。あたいはね。大ちゃんのことを信じてたんだ」

話の流れでチルノは慧音の家にお邪魔することになった。

2人は竹林の方向にある慧音の家に向かってゆっくり歩いていく。

「たしかにあたいは冬の間はレティの所に遊びに行くさ。だけどね。それは冬の間も大ちゃんの所にいたら凍死させちゃうかもしれないからわざとなんだよ。仕方ないんだ」

「そうか。全然わからん。一体お前達に何があつたんだ？」

慧音は鳴れた様子でチルノの頭を撫でながら話を聞く。

「えつと、レティが「今年の冬はもうおしまいね」って言って行っちゃったからあたいは大ちゃん家に帰ろうとしたんだ。そしたらあたいと大ちゃんの家なのに知らない妖精が住んでたんだ」

「あー……」

「いつもなら大ちゃんあたいの部屋も掃除してくれてるのに、今年は全然掃除してくれて無いんだ。家だつて知らない間に改造しててさ。三階まで作っちゃったんだ」

慧音は頭をぽりぽりとかく仕草をする。

「チルノ。その妖精の顔を見たか？」

「うん。黒い色の髪だったよ。短かった」

「そうか、やっぱりな」

慧音はため息をつく。

「その妖精はな。大妖精だ。生まれたてのな」

「先生知ってるのか！」

「まあな」

慧音は思い出すかの様に腕組みをする。

「あれは確か2ヶ月くらい前だったな。大妖精…いや、お前の言う大ちゃんが血相変えて私の所に来たんだ。手には小さい妖精を抱えていてな、ひどく消耗していたんだ。他に頼れる所が無かったんだろうな」

「その妖精があの子なのか？」

「きつとそのはずだ。まあ流石は妖精といったところか。妹紅がいる暖かい部屋で一週間くらい世話をしやっただすっかり元気になったさ」

チルノは慧音からその妖精のことを聞いた。

名前はクロムというらしい。

大ちゃんが家の近くで倒れているクロムを見つけたが、ろくに治療が出来なかった為慧音の家に連れてきた。

そして今は大ちゃんの家に住候しているという訳のようだ。

「私達で1ヶ月位預かってたんだが妹紅の事が気に入ったらしくくな。体調が戻ってから稽古を付けてもらってたぞ。妖精のくせになかなか筋がいいらしい」

「は？ 格闘術を使う程度の能力の妖精なのか？」

「さあな、わからん。でも大妖精…じゃない。大ちゃんが言うんだ

から間違いないだろう。あの子は大妖精だ」

普通の妖精の力はとても弱い。普通の人間の子供にだって軽く負けるだろう。

だが時折力の強い妖精が生まれる事がある。その妖精は大妖精と呼ばれて、何かしらの能力を持っている。

体術という物理的な能力は考えにくいだが、クロムが大妖精なのは確かなようだ。

「さて、もうそろそろ私の家だが」

「先生、やっぱりあたい帰る」

「そうか」

慧音は笑顔で頷く。

「あ、そうだ」

チルノは目を閉じて集中すると手に力を込めて冷気を集中させる。その手には四本の矢印が組み合わさった十字架に似て非なるアクセサリーが収まっていた。

「レティの持つてる飾りが綺麗だったから冬の間特訓して作れるようになったんだ。一週間くらいは溶けないよ。お礼に先生にあげる」  
「ほう。嬉しいじゃないか。妹紅には触らせん様にしないとな」

チルノから氷のアクセサリーを受け取る。

慧音は本当に嬉しそうにしてポケットへとしまった。

「じゃあね。先生」

「あ、チルノ待ってくれ」

慧音は思い出したかの様にチルノを引き止めた。

「阿求を見なかったか？」

「うん。見てないよ」

「そうか。ならいいんだ」

阿求は慧音と同じ学校で働いている女性である。

働いているとは言っても授業をすることはあまり無く、書き物をしていることが多いらしい。

チルノは寺小屋で会うことがあり、それ程親しい訳ではないが知っていた。

「いや、阿求がな。最近寺小屋に顔を出さないんだ。…まあもうすぐ転生が近いから無理に来させる訳にはいかんのだが心配でな…」

阿求は阿礼乙女と呼ばれていて、それ程長くは生きられないらしい。

だが転生する術を持っていて、死ぬ数年前から準備が必要であると寺小屋の子供達からチルノは聞いていた。

「引き止めて悪かったな。クロムと仲良くしろよ」

「うん。ありがとう先生！」

チルノは夕暮れの空を全速力で飛んでいった。

「阿礼…私の杞憂だといいたがな…」

慧音は小さく呟くと自宅に向かって歩いていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3221z/>

---

仮典・妖精大戦争

2011年12月11日04時30分発行